

# 新世界の生活

藤井颯太郎

拝啓 お父さん

はじめまして、アナタの娘です。すでにご存知かも知れませんが、先週、母が亡くなりました。葬儀を終え、遺品の整理をしていた際、アナタと母が交わっていた手紙の束を見つけ、アナタが生きていたことを初めて知りました。母は「三日に一度は気が向かないこともやってみる」という不思議な、自分だけのルールを持っていました。母が何故そんな変なルールを守り続けていたのか私には理解できませんし、今から母に意味を確かめることも、もう出来ません。試しに、気が向かないまま、アナタに手紙を書いてみようと思いました。母と同じルールで生きてみました。あまり良い気分ではないですね。二度と会うことも無いアナタにこれ以上無駄なことを書いてしまわないよう、この辺で筆を置きます。そちらにも生活や日常があると思いますので、お返事の手紙は一切不要です。くれぐれもお身体に気をつけて、長生きして下さい。

敬具



拝啓 お父さん

届いた手紙を読むかどうか一日悩みました。届いた手紙を読み、返事を書くかどうか更に三日悩みました。「返信不要です」と私は書きました。返信だけではありません、全ての提案が不要です。話し合う為の店の住所も、アナタが私を引き受けることも、全てが、すべて不要です。母にだけ打ち明けた小説のことを、アナタに漏らされていたことに、とても驚きました。とても傷つきました。二度と連絡を取ろうとしないでください。アナタに頼らず生きていくつもりです。大丈夫です。

敬具

拝啓 ミカさん。お手紙ありがとうございます。とても嬉しいです。

私と彼女はこの二年ほど、手紙だけでやり取りを続けていました。病気が判明したとき彼女の方から手紙で知らせて下さったんです。

アナタが十五歳になったこと、今年の三月中学を卒業したこと、少しずつ小説を書き溜め先月初めて賞に応募してみたことなど、色々なことをアナタのお母様から伺いました。彼女からの手紙に、この二年間、何度も支えられました。改めて、ご卒業おめでとう。

お母様と私の手紙を読まれたなら、すでに把握されていると思いますが、彼女が亡くなった時は、私がアナタの身元を引き受けることにしましょうと、彼女と話してあります。直接お会いし、そのことについてお話しする時間をください。

私は現在飲食店を営んでいます。店の住所などを記載したメモを同封いたします。よろしければ、放課後にもご足労頂き、私の店で少しお話しできませんでしょうか？



拝啓 ミカさん。先日は店まで足をお運び頂きありがとうございました。とても楽しい時間を過ごすことができました。アナタの「三日に一度」が偶然あの日に重なり、よかったです。

私が女性であること、お母様のお話、何故私たち三人は一緒に生活を送れなかったのか、手紙ではなく直接お会いしてお伝えしたいことが沢山ありました。聞きたいことは山程あっただろうに、私の言葉を遮ることもなくただ黙って耳を傾けてくれるアナタを見て、アナタのお母様とそっくりだと思いました。お母様もいつも耳を傾けてくれる人でした。

「気が向かないこともやってみる」というのは彼女にとって「耳を傾けること」に近かったのかも知れません。知らないことを知るため、自分から見えていない世界に耳を傾けるために、あの不思議なルールを作ったのかも知れません。彼女の話を始めると長くなり過ぎてしまうので、そこら辺はまた後日、ゆっくりとお話ししましょう。

これからは毎日直接お話し出来るのに、随分と長く手紙を書いてしまいました。送って頂いた荷物はすでに無事我が家へ届きました。あとはアナタが届くのを待ちしています。